

近現代のタイル考古学

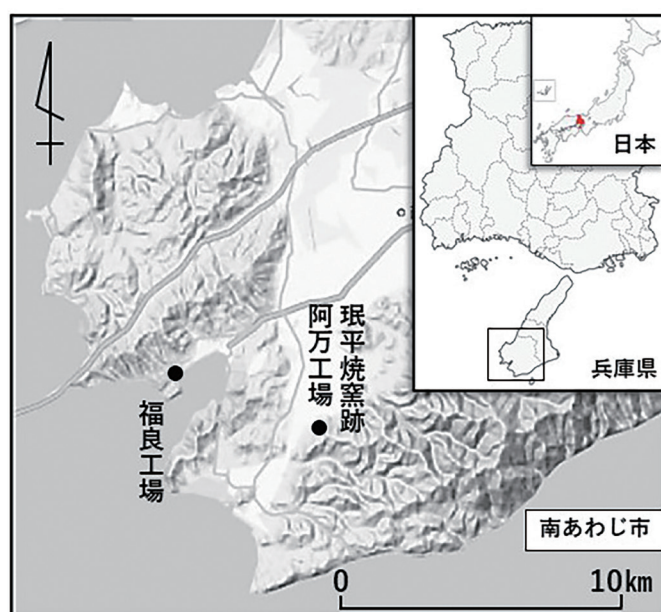
——淡陶社生産資料の編年と流通——

深井 明比古

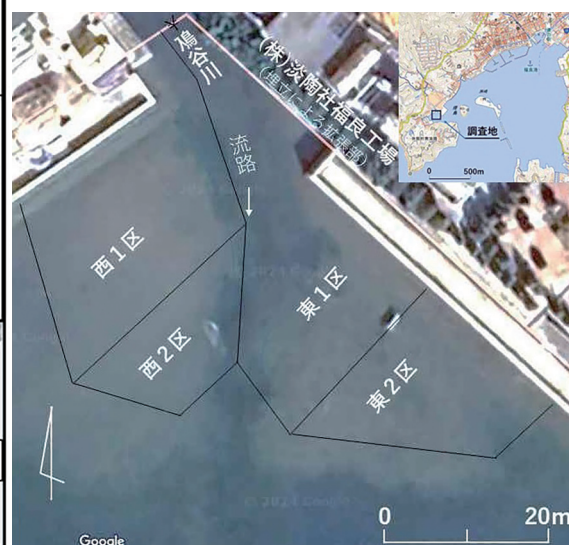
はじめに

我が国では明治時代から昭和戦前の歴史遺産が近代文化遺産として認識され、地域の歴史を解明する上で特に重要なものを「近代遺跡」として発掘調査が進みつつある。本研究は平成 15 (2003) 年、兵庫県南あわじ市の珉平焼窯跡発掘調査において明らかになったタイル生産品の実態を踏まえ、大正 7 (1918) 年以来タイル専門工場として稼働している福良工場周辺海域の採集品を報告すると共に、我国のタイル編年の根幹をなす裏型編年と流通を考察するものである。

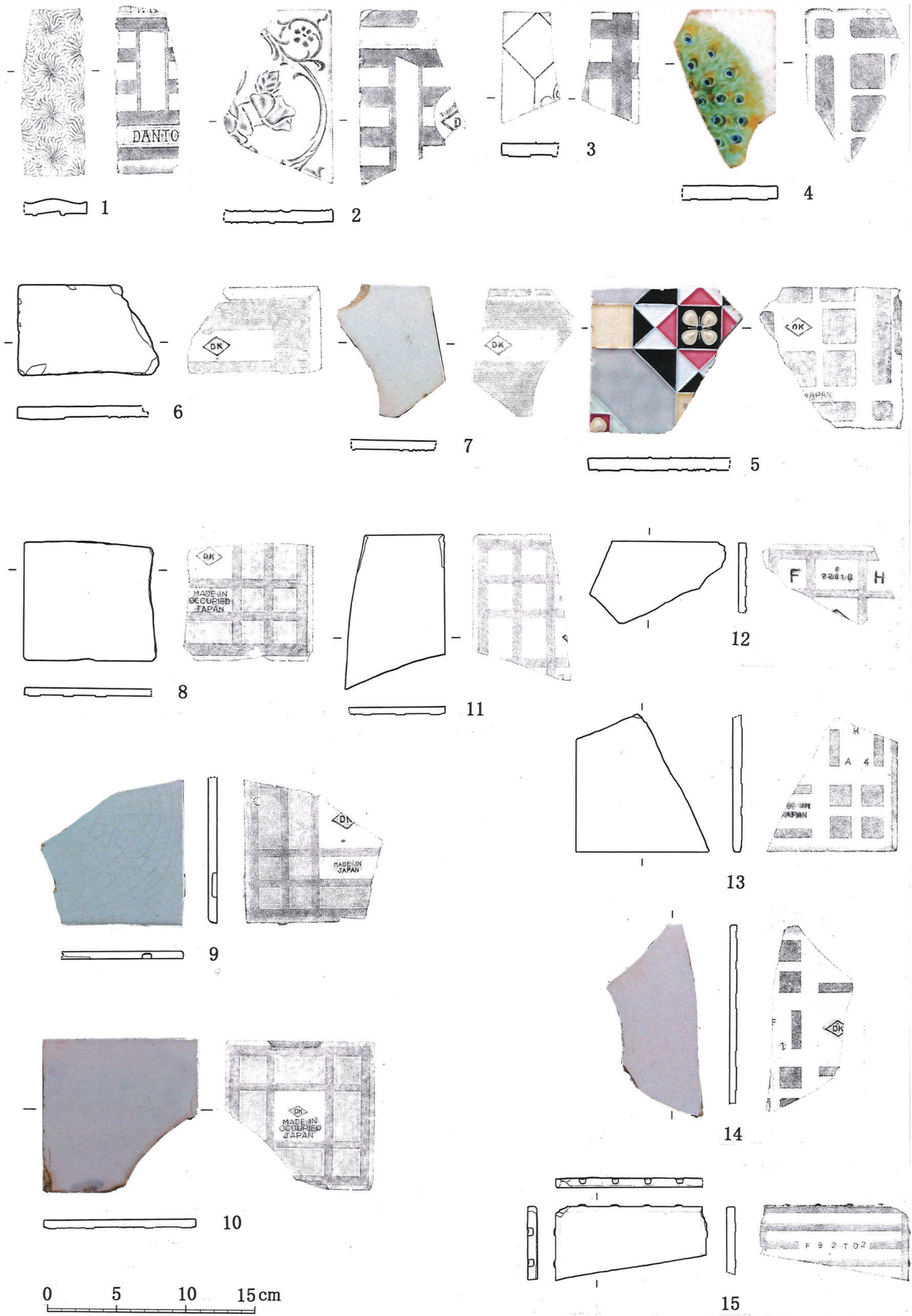
淡陶社は明治 18 (1885) 年に創業した阿万工場 (兵庫県南あわじ市北阿万伊賀野) にて明治 20 年代にタイルの試作を重ね、明治 30 年代に珉平焼の伝統技法である「型づくり、豊富な釉薬、硬質焼成」を駆使し、我国で初めて西洋的なタイルの本格生産を開始した。明治 41 (1908) 年、東京高等工業学校で窯業を学んだ能勢敬三が故郷の淡陶社で研究を重ね、乾式タイルの製造に成功した。大正 7 (1918) 年に福良工場 (同市福良) が完成し、阿万と福良の二か所で増産を重ね、近現代のタイル生産をリードしてきた。それらの資料を足がかりに明治 20 年代から現代 (2025 年) までの約 140 年間のタイルを分類・編年することは我が国のタイル文化変遷の主軸となる。その成果を世界各地に残る歴史文化遺産解明の研究資料として提示する。



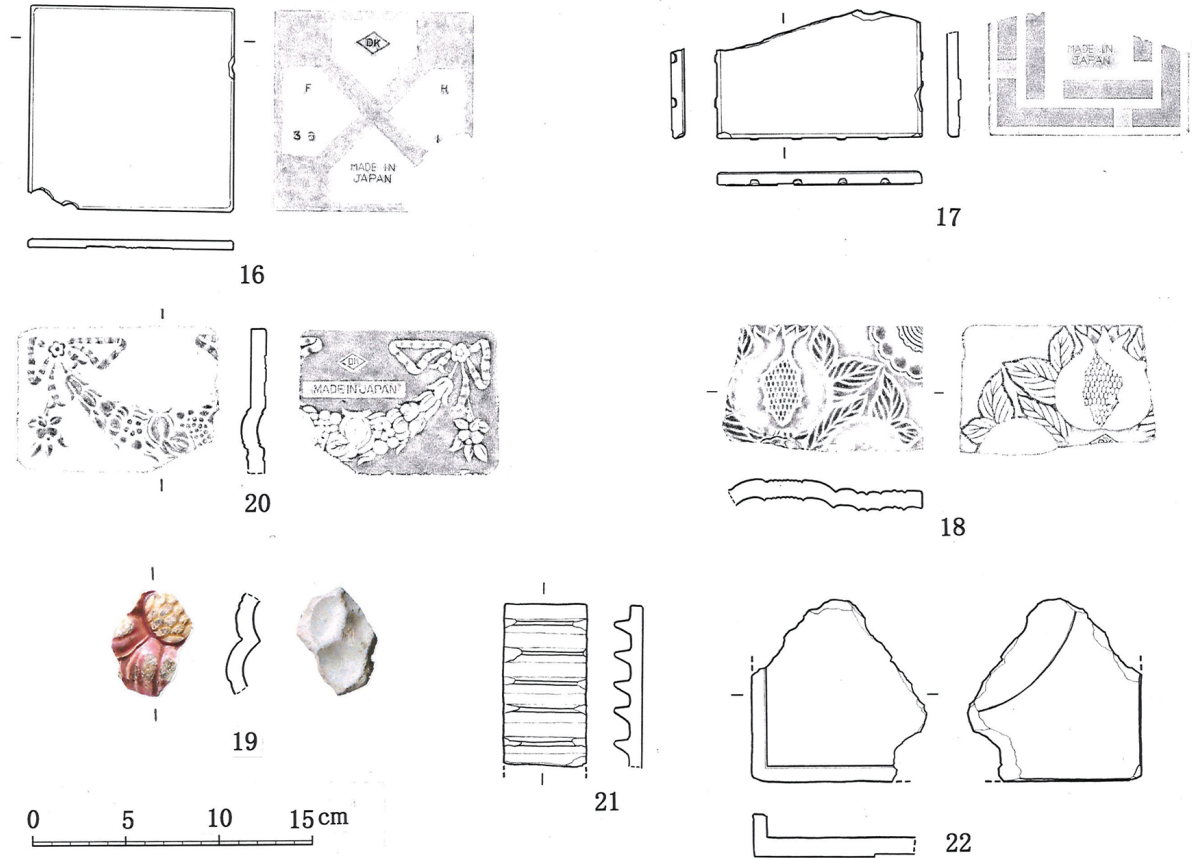
第 1 図 位置図



第 2 図 福良工場周辺海域調査地点図



第3図 採集品実測図



第4図 採集品実測図

第1表 採集品一覧表

番号	種別	採集地点	成形	形状		寸法 mm () 残存値			焼成	表面				裏面		側面	備考
				規格(インチ)	形態	横	縦	厚さ		カタログ番号	文様表現法	文様種類	エッジ	形態	印等		
1	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(47)	(123)	9.5	素焼	No.58	レリーフ	霜降文	ストレート	C	DANTO		
2	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(81)	(127)	8.5	素焼	No.18	レリーフ	草花文	ストレート	D	◇DK TRADE		
3	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(44)	(82)	9.0	素焼	No.48	チェーブライニング	幾何学文	ストレート	E			
4	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(74)	(117)	9.5	本焼	No.534	多彩レリーフ	クジャク	ストレート	F			
5	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(108)	(106)	8.2	本焼	-	チェーブライニング	幾何学文	ストレート	F	◇DK		
6	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(101)	(65)	8.5	素焼		無地	無文	ストレート	G	◇DK		
7	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(76)	(95)	7.0	本焼		無地	無文	ストレート	G	◇DK		
8	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(95)	(85)	6.2	素焼		無地	無文	ストレート	H1	◇DK		MADE IN OCCUPIED JAPAN
9	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(102)	(106)	6.2	本焼		無地	青無地マット	クッション	H2	◇DK	スパーサー付	
10	タイル	東1区	乾式	4.3" × 4.3"	正方形	109	109	6.2	本焼		無地	白無地	ストレート	H3	◇DK		MADE IN OCCUPIED JAPAN
11	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(73)	(110)	6.2	素焼		無地	無地	ストレート	K1			
12	タイル	東1区	乾式	4.3" × 4.3"	正方形	(95)	(59)	5.6	素焼		無地	無地	ストレート	K3	FH製造番号等		
13	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(94)	(98)	7.0	素焼		無地	無地	クッション	L	MADE IN JAPAN		
14	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(65)	(138)	5.4	本焼		無地	白無地	クッション	L	◇DK		
15	タイル	東1区	乾式	4.3" × 4.3"	正方形	109	(54)	6.5	素焼		無地	無地	クッション	M2	製造年月等番号	スパーサー付	
16	タイル	東1区	乾式	4.3" × 4.3"	正方形	108	108	5.0	素焼		無地	無地	クッション	N	◇DK製造年月等		
17	タイル	東1区	乾式	4.3" × 4.3"	正方形	109	(68)	6.5	素焼		無地	無地	クッション	O		スパーサー付	
18	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(105)	(65)	9.5	素焼	No.565 他	スペシャルエンボス	ザクロ	ストレート				
19	タイル	東1区	乾式	6" × 6"	正方形	(57)	(42)	8.3	本焼	No.1611	スペシャルエンボス	タチアオイ	不明				
20	タイル	東1区	乾式	6" × 3"	長方形	(109)	78	8.0	素焼	No.400 他	スペシャルエンボス	花鎖文	ストレート		MADE IN JAPAN		
21	段状仕切具	西1区			長方形	43	(87)	6.7						平坦		階段状	釉焼窯道具
22	匣鉢	西1区			正方形	(91)	(96)	10.3						径145mm 凹み	径145cm 凹み		素焼き窯道具

第2表 淡陶社タイル編年表

期	I		II		III		IV			V		
時期	1885		1901		1908		1912			1926		1945
要素	明治時代				大正時代					昭和時代（戦前）		
要素	18	20年代	30年代	40年代	前	中	後	初期		10年代		
要素	淡陶社創業	タイル（敷瓦）試作	湿式タイル本格生産	レリーフタイル生産	乾式タイル生産	ロゴ「DK」にチューブラーラインングタイル	乾式タイル一本化	銅板転写タイル生産	スペシャルエンボスタイル生産	白無地タイル増産	文様の多様化	タイル生産縮小
要素	← 湿式製法（1種土）		← 湿式製法（2種土）		← 乾式製法			← 多彩ヴィクトリアン（マジョリカ）・中華柄文様多種		← 無地タイル主体		
表文様	和柄 				洋柄 							
裏調整・裏型	クシガキ斜格子		クシガキ条数各種		クシガキ条		A3, A4, E3, B1, B1-2, C1, D5, B10, B11, B12, A12, A13, B19, B21, B22		F1, G1			

1 福良工場付近の調査手法と成果

大正7(1918)年、陸軍練兵場約16,500m²の払い下げ用地に、淡陶社乾式タイルの開発者である能勢敬三が福良工場長として総合的に設計し、タイル生産専門工場として竣工した。

これまでのタイル編年は珉平焼窯跡出土品として、淡陶社阿万工場が明治時代前期から終戦直後の昭和20年代(1952)年頃までの不良品の表文様・裏型の編年を提示した。福良工場では阿万工場を上回る規模でタイル等を生産したが、その品種や時期が不明なため海浜部を分布調査した。

今回報告する遺物は海浜部のもので、福良湾に注ぎ込む鳩谷川河口付近で東1区、東2区、西1区、西2区に便宜的に区分けした2,180m²が対象である(第2図)。

遺物の集中度は東1区が最多で、次いで西1区、東2区と続き、西2区では採集品はなかった。

採集した遺物はタイル未製品、陶器未製品、匣鉢、窯道具など福良工場に関係する遺物の他、周辺の民家から流入した近世以降の陶磁器、瓦、ガラス、陶器製花留(淡陶製)などが採集された。

ここでは福良工場生産品の特定を主眼に置くため、タイル・陶器未製品や窯道具を取り上げる。淡陶タイルの編年は珉平焼窯跡出土タイルの裏型分類を継承して新形式は新たに記号を付した¹⁾。

1は霜降り文レリーフ²⁾、裏型は横方向のストライプに縦長方形の凹みを持つCタイプで、大正中期の生産品である。2は草花文レリーフトイルで縦方向の凹みが台形のDタイプで大正末頃の生産品である。3は文様輪郭を凸線で描くチューブライニング手法³⁾で、裏はEタイプで大正中期から末頃である。4・5は裏型Fタイプでクジャク、幾何学文をあしらう昭和初期の生産品である。6・7は無地タイルで裏型は全体に細線が施され、長方形枠内に幅20ミリの菱形DK印が陽刻されるGタイプで、昭和10年代の生産品である。8・9・10は無地タイルで、裏型は全体に細線があり幅7～8ミリの凸帯で方形区画され、いずれも菱形DK陽刻が中央に配される。8・10は「MADE IN OCCUPIED JAPAN」が陽刻される。これは戦後のGHQ統治下で輸出品に掲示が義務化されたもので、昭和22～27年の生産品に限定される。9は側面にスペーサーラグ⁴⁾の突起が見られる。8はH1、9はH2、10はH3タイプである。これらは昭和20年代以降のとして大まかに捉えられていた。以上が珉平焼窯跡発掘調査報告書で示されたタイル編年に符合するものである。

これ以降は新たに確認された裏型型式である。11・12は無地タイルで、裏型は突線で区画されるが細線はない。12は福良工場製を示すイニシャル「F」が残る⁵⁾。11をK1、12をK3と分類した。13・14は無地タイルで、裏型は方形区画が凸をなす。これらはLと分類した。15は狭小なスペーサーがあり、裏型全体がストライプで構成される。福良工場製を表す「F」が示され、M2と分類した。16は無地タイルで、裏型の陰刻部が野球のホームベース状をなし、Nと分類した。17は無地タイルで狭小なスペーサーがある。裏型には幅10ミリの直線やL字の凸帯が配されOと分類した。18・19・20はいわゆるマジョリカタイルで、18・19は凹凸が著しいスペシャルエンボスタイルである。21・22は窯道具で、21は釉焼時に匣鉢に立てかけて重ね焼きに使用する部品である。22は方形タイル焼成時の匣鉢である。

以上の採集品には明治40年代のAタイプや大正初期を示すBタイプは採集されなかった。これらから福良工場は大正7年からタイル生産が開始されたことが裏付けられる。なお、採集品には洋皿の未製品がある。これは福良工場の統計資料に記された洋皿の生産を裏付けるものである。

2 裏型分類と編年

タイル考古学の使命の一つにタイルの分類と編年がある。珉平焼窯跡はタイルや陶磁器類は幕末から昭和20年代までの廃棄品が累積した「奇跡の谷」である。一方、大正7(1918)年創業の福良工場に面する福良湾は創業期から現代までの資料が散布する「稀有な海」とも言えよう。これらの両工場からの資料を製法要素、表文様の様相、裏調整や裏型変化を考慮して明治20年代から令和7年までの約140年をIからXまでの画期に分類した。なお編年は6インチ正方形を基本とした。

I期は明治20～30年代前半で、江戸時代から続く敷瓦の要素が色濃い湿式タイルである。表は金彩を多用した上絵付、裏は明らかに張ることを意識した斜格子クシガキが特徴的である。

II期は湿式タイル本格生産の明治30年代と乾式タイルが開発される41年までの期間で、瓔珞文や花柄を主体とする。裏は5～12本が一単位のクシガキが使用されるが種類は統一されていない。

III期は乾式タイルが開発される明治41～45年である。湿式から乾式への移行期で、湿式坯土は表面や側面には白色精良土、充填土は淡褐色土で構成される。文様はヴィクトリアンタイル調の生産を開始し、その手法はレリーフが主体だがチューブライニングもではじめる。この時期は湿式・乾式共に同一柄が生産される。乾式タイルは湿式タイルの陶土とは異なる坯土素材や、金型圧縮製法の違いにより大きく技術革新した時期である。湿式の裏側は7本のクシガキに統一され、乾式A3は凸帯格子の中央に「千鳥印 大日本商標淡陶會社」が陽刻され、3インチ正方形A12も似る。

IV期は乾式タイルに一本化され、マジョリカタイルや白や茶色無地が大量生産された。文様技法はレリーフからチューブライニングが主体となり、転写紙、スペシャルエンボス、擬石タイルも開発される。裏型は淡陶(株)の新ロゴである菱形の中に「DK」が採用され、昭和60(1985)年まで使用された。裏型は格子A4のほか、井桁状E3、ストライプB1・B1-2、またその両側に長方形C1や台形の凹みD5を持つものなど多種に及ぶが年代決定には欠かせない細かな時代変化を示す。

V期は昭和初期から終戦までの期間で文様の多様化は続くが、第二次世界大戦時には物品税の税率アップ等により生産量の縮小を余儀なくされた。裏型は昭和初期がF1、10年台はG1となる。

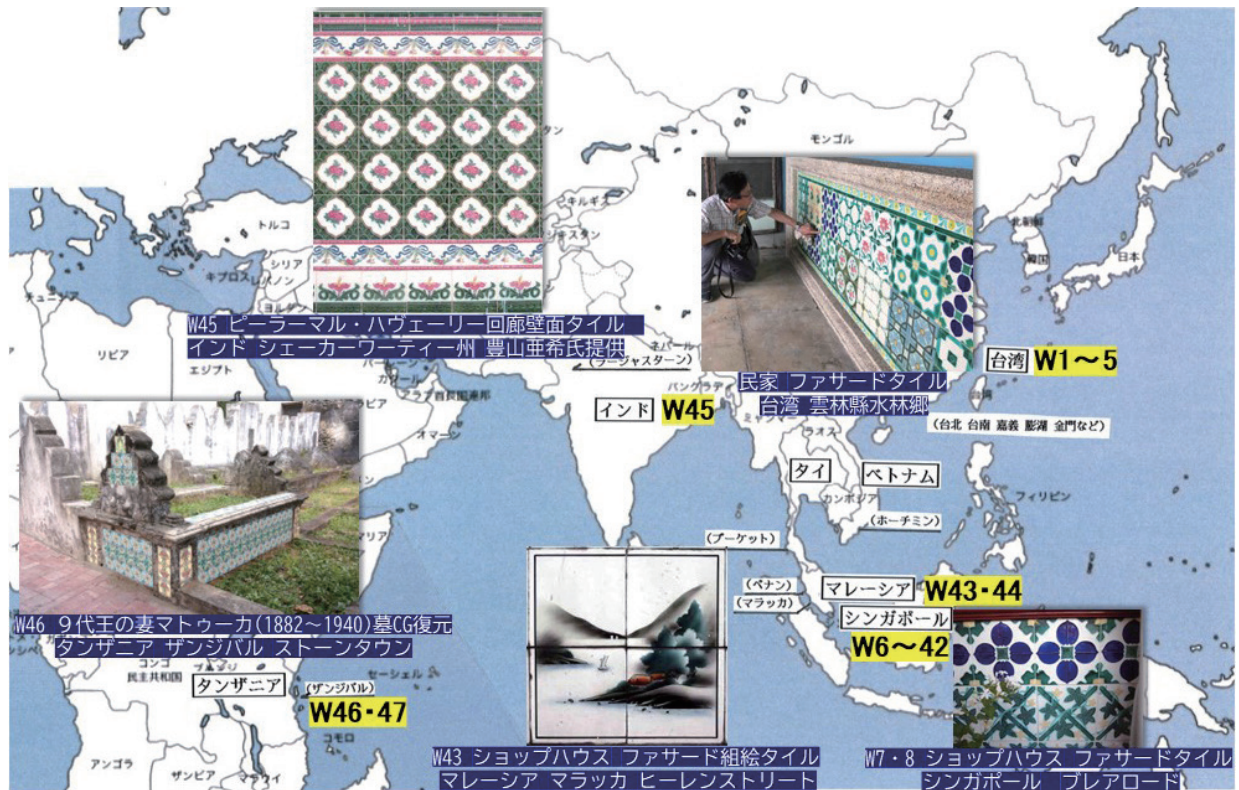
VI期は終戦後のタイル生産転換期で、金型が真鍮製から鉄製に変更し強度を増すとともに、硬質陶器から石灰質陶器タイルに転換した。戦前のマジョリカタイルは影を潜め、GHQ占領下の需要もあり主流は色無地となる。裏型は細線G2・H1から細線が省かれたK1、3寸6分角も多数生産された。「MADE IN OCCUPIED JAPAN」は昭和22～27年の輸出向けに記されたものである。

VII期は昭和30年代後半～40年代前半期で、タイル表面角が丸みを帯びるクッションエッジタイルやスパーサーラグ付きタイルが生まれ、シルクスクリーン手法や磁器質タイルが本格化した。裏型は格子細線で中央枠が40ミリ程度のH2、方形が凸のL1、ホームベース型N1も使用される。

VIII期は昭和40年代後半～50年代でデザインタイルや大判タイルも生産された。目地共寸法移行期で、6インチ(150平)は152.8から147.7ミリに。裏型変化は少なく新たにR1が生まれる。

IX期は昭和60(1985)年にロゴが「DK」から「Danto」に。内外装タイルが共用化し、床タイルが主流となる。文様は多様化、大判の増産によりS1・T1、150平用にP1・Q1が生産された。平成始めに鉄製金型にラバーを装着し圧縮時の剥がれを容易にする手法が開発された。

X期は令和初期に歴史的タイルを見直してマジョリカタイルの復刻、新ブランド「A.a.Danto」のロゴを用いている。石面や結晶釉タイルの生産をはかり、V1、U1、Q1の裏型を使用している。



第5図 世界各地の近代日本製タイル分布図

3 淡陶社をはじめとする日本製タイルの分布

(1) 世界各地における日本製タイルの流通と分布

第二次世界大戦前および終戦直後頃、世界各地に日本製タイルが輸出され建造物などに使用されているもので、生産者が確認された例を第4表に記載した。

我が国における屋内外を飾る西洋風タイルの生産は明治30年代から始まった。ジャポニズム全盛期に淡陶社で生産した陶磁器は世界各地に流通した。その勢いに遅れはとるもの新参の湿式タイルは台湾やシンガポール方面を皮切りに出回ることになる⁶⁾。

大正期になると我が国のタイルメーカー十数社が乾式タイルを安定的に生産しはじめた。高品質・低価格、しかも現地で要望されるデザインを取り入れたタイルを即座に生産し、やがて西欧文化圏で使用されたヴィクトリアンタイルやベルギータイルに取って代わって日本製乾式タイルが席捲することとなる。

昭和9年(1934)の全国硬質陶器タイル業者生産実績によれば、淡陶(株)は月産104万枚(全国一位・総生産の1/6)となる。国内タイル生産者の輸出先は中国・インド、インドネシア、フィリピン、オーストラリア、中近東、アフリカ等に及んだ。特にアメリカ、カナダ、オーストラリア方面向けに艶消釉、不透明釉、結晶釉などの特殊色釉も開発され、イギリスにはクッションエッジタイルも輸出された。

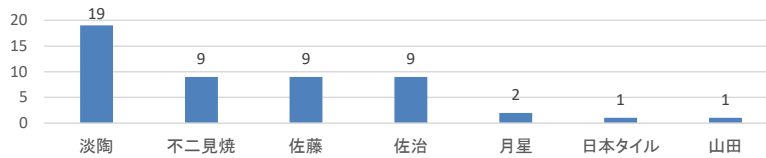
台湾では生産者が判明したものはW1～W5の5例。大正時代(1920年代)以降の台湾本島の他、澎湖島や金門島の富裕層の家屋に多数の日本製タイルが外装や内装に使用された。深坑黄氏永安居(W1)や澎湖二嵌陳宅(W4)などでは淡陶社製の形象タイルが確認された。

プラナカン (Peranakan) 文化のコミュニティが残るシンガポール、マレーシア (マラッカ・ペナン)、タイ (プーケット) では今も日本製マジヨリカタイルが多数存在する。シンガポールではショップハウスの外壁や墓地等に存在し、修理時に生産者が判明している (W6～42)。マレーシアのマラッカ

第4表 世界各地の近代日本製タイル一覧表

No.	名称	所在地	使用箇所等	建築等年代	生産者等						規格(インチ)/品名	裏面等特徴	編年時期	掲載番号	
					淡陶	不二見焼	佐藤	佐治	月星	山田					日本タイル
W1	深坑黄氏永安居	台湾台北県深坑郷	洋館建物各所	大正1(1912)	1							6×6 報告 T104 花柄・ 形象タイル他	報告裏型F類	昭和初期	18
W2	台南爱国婦人会館	台湾台南市中西区	2階便所	昭和戦前						1		白無地 100mm 角	井桁状中央 トンボ印		24
W3	麟洛徳源堂	台湾屏東縣麟洛郷	屋根	昭和2(1927)	1							6×6	-	明治末	36
W4	澎湖二嵌陳宅	台湾澎湖縣二嵌	建物各所	大正1(1912)	1							形象タイル報告 T189~190	-	昭和初期	19
W5	陳徳幸洋楼	台湾金門縣金沙鎮碧山1号	建物外壁	昭和1(1926)	1							6×6 No.46 幾何学文	報裏型C類	大正中頃	
W6	カトン アンティークハウス	シンガポール E Coast Road	階段	不明		1						乾式 タチアオイスベ シヤルエンボス	記載なし	1915~1935	37 P16
W7	ショップハウス	シンガポール Blair Road	外壁	不明	1							乾式 竹に菱	記載なし	1918~1935	37 P59
W8	ショップハウス	シンガポール Blair Road	外壁	不明				1				乾式 四方花卉	記載なし	1918~1935	37 P59
W9	ショップハウス	シンガポール Koon Seng Road	門柱	不明				1				乾式 バラ	記載なし	1923~1935	37 P77
W10	ショップハウス	シンガポール Koon Seng Road	門柱	不明				1				乾式 幾何学花文	記載なし	1915~1935	37 P80
W11	ショップハウス	シンガポール Syed Alwi Road	窓脇柱	不明		1						乾式 タチアオイスベ シヤルエンボス	記載なし	1915~1935	37 P96
W12	ショップハウス	シンガポール Jalan Besar	窓枠下部	不明				1				乾式 幾何学花文	記載なし	1915~1935	37 P104
W13	ショップハウス	シンガポール Tessensohn Road	門柱	不明	1							乾式 幾何学バラ文	記載なし	1918~1935	37 P114
W14	ショップハウス	シンガポール Tessensohn Road	入口脇柱	不明				1				乾式 幾何学バラ文	記載なし	1923~1935	37 P115
W15	ショップハウス	シンガポール Tessensohn Road	外壁	不明	1							乾式 花文	記載なし	1915~1935	37 P115
W16	集合住宅	シンガポール Petain Road	外壁	不明		1						乾式 菊文	記載なし	1915~1935	37 P119
W17	集合住宅	シンガポール Little India	外壁	不明				1				乾式 バラ文	記載なし	1923~1935	37 P124
W18	集合住宅	シンガポール Roberts Lane	外壁窓枠下部	不明	1							乾式 幾何学バラ文	記載なし	1918~1935	37 P127
W19	ショップハウス	シンガポール Roberts Lane	外壁窓脇	不明	1							乾式 バラ文	記載なし	1918~1935	37 P131
W20	ショップハウス	シンガポール Ann Siang Road	外壁窓下部	不明		1						乾式 バラ文	記載なし	1915~1935	37 P144
W21	ショップハウス	シンガポール Ann Siang Road	外壁窓下部	不明				1				乾式 花文	記載なし	1915~1935	37 P145
W22	ショップハウス	シンガポール Everton Road	外壁窓下部	不明		1						乾式 クジャク組文	記載なし	1915~1935	37 P148
W23	ショップハウス	シンガポール Everton Road	外壁窓下部枠	不明	1							乾式 6"×3"花鎖文	記載なし	1915~1935	37 P148
W24	ショップハウス	シンガポール Everton Road	2階外壁窓下部中央	不明				1				乾式 黄花文	記載なし	1915~1935	37 P149
W25	ショップハウス	シンガポール Everton Road	2階外壁窓下部枠	不明				1				乾式 青バラ文	記載なし	1915~1930	37 P149
W26	ショップハウス	シンガポール Blair Road	1階外壁窓下部	不明				1				乾式 青バラ文	記載なし	1923~1935	37 P150
W27	ショップハウス	シンガポール Blair Road	1階外壁下部	不明	1							乾式 球形花文	記載なし	1918~1935	37 P153
W28	ショップハウス	シンガポール Neil Road	2階外壁	不明				1				乾式 バラ文	記載なし	1918~1935	37 P153
W29	ショップハウス	シンガポール Emerald Hill Road	1階外壁	不明		1						乾式 クジャク組文	記載なし	1915~1935	37 P157
W30	建物塀	シンガポール Emerald Hill Road	両門柱上下	不明				1				乾式 赤花文	記載なし	1915~1935	37 P163
W31	建物塀	シンガポール Emerald Hill Road	両門柱中央	不明	1							乾式 花鎖文	記載なし	1918~1935	37 P163
W32	建物塀	シンガポール Emerald Hill Road	塀壁下部	不明		1						乾式 花鎖文4枚組	記載なし	1915~1935	37 P163
W33	潮州人墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓碑両脇	不明	1							乾式 幾何学花文	記載なし	1918~1935	37 P165
W34	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明				1				乾式 赤桔梗文	記載なし	1923~1925	37 P166
W35	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明				1				乾式 水鳥風景文	記載なし	1915~1935	37 P166
W36	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明				1				乾式 バラ文	記載なし	1923~1925	37 P167
W37	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明				1				乾式 アールデコバラ文	記載なし	1915~1930	37 P167
W38	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明				1				乾式 クジャク組文	記載なし	1915~1935	37 P172
W39	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明	1							乾式 花球場4組文	記載なし	1918~1935	37 P172
W40	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明				1				乾式 バラ文	記載なし	1915~1935	37 P173
W41	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明	1							乾式 花文	記載なし	1918~1935	37 P173
W42	墓	シンガポール Bukit Brown Cemetery	墓壁面	不明				1				乾式 バラ幾何学文	記載なし	1915~1935	37 P174
W43	ショップハウス ファサード組絵タイル	マレーシア マラッカ ヒーレンストリート	建物外壁	不明	1							6×6 報告 T135	不明	1920~1940頃	22
W44	カンボンクリンモスク	マレーシア マラッカ	回廊外壁	17世紀後半	1			1				6×6 回廊外壁: 報告 T76、階段: 佐治 No.7	回廊外壁: 報 裏型CかDか	1920~1940頃	22・29
W45	ビーラーマル・ハウエーリー建築	インドラージャスターン州シェーカーワーティ地方 バガル	建物内壁 ファサード回廊壁面	1928	1							6×6 他 淡陶カタログ No.12 402 509	報裏型F類	1925~1935	14・15
W46	マトゥーカ墓 (9代王の妻)	タンザニア ザンジバル ストーンタウン バレス墓地	墓壁面	1940				1				乾式		昭和初期	31
W47	インドコミュニティの墓	タンザニア ザンジバル ストーンタウン ボボラ墓地	墓壁面	不明 1950	1			1		1		乾式		昭和初期 昭和戦後	31
計					19	9	9	9	2	1	1				

第5表 世界各地の近代日本製タイル生産者確認件数グラフ



のヒーレンストリートでは淡陶製の風景タイル（W43）が残るほか、カンポンクリンモスクの回廊外壁に珉平焼窯跡発掘で出土した同型の淡陶製タイルが張られている（W44）。

インドでは豊山亜希氏の調査により商業コミュニティの一つであるマールワーリー（Marrwari）の邸宅建築に多量の淡陶タイルの装飾が確認されている（W45）。

東アフリカタンザニアのウングジャ島（ザンジバル）ストーンタウンでは王宮墓地があり、増田研氏と深井の調査によりサイーダ・マトゥーカ（1882-1940）王妃の棺外面に佐藤化粧煉瓦工場製のタイルを確認した。また近隣に位置するインド人ムスリムコミュニティのボホラ墓地では「ST」佐藤化粧煉瓦工場製、「DK」淡陶株式会社製、「KY」山田タイル製のタイルを確認した。

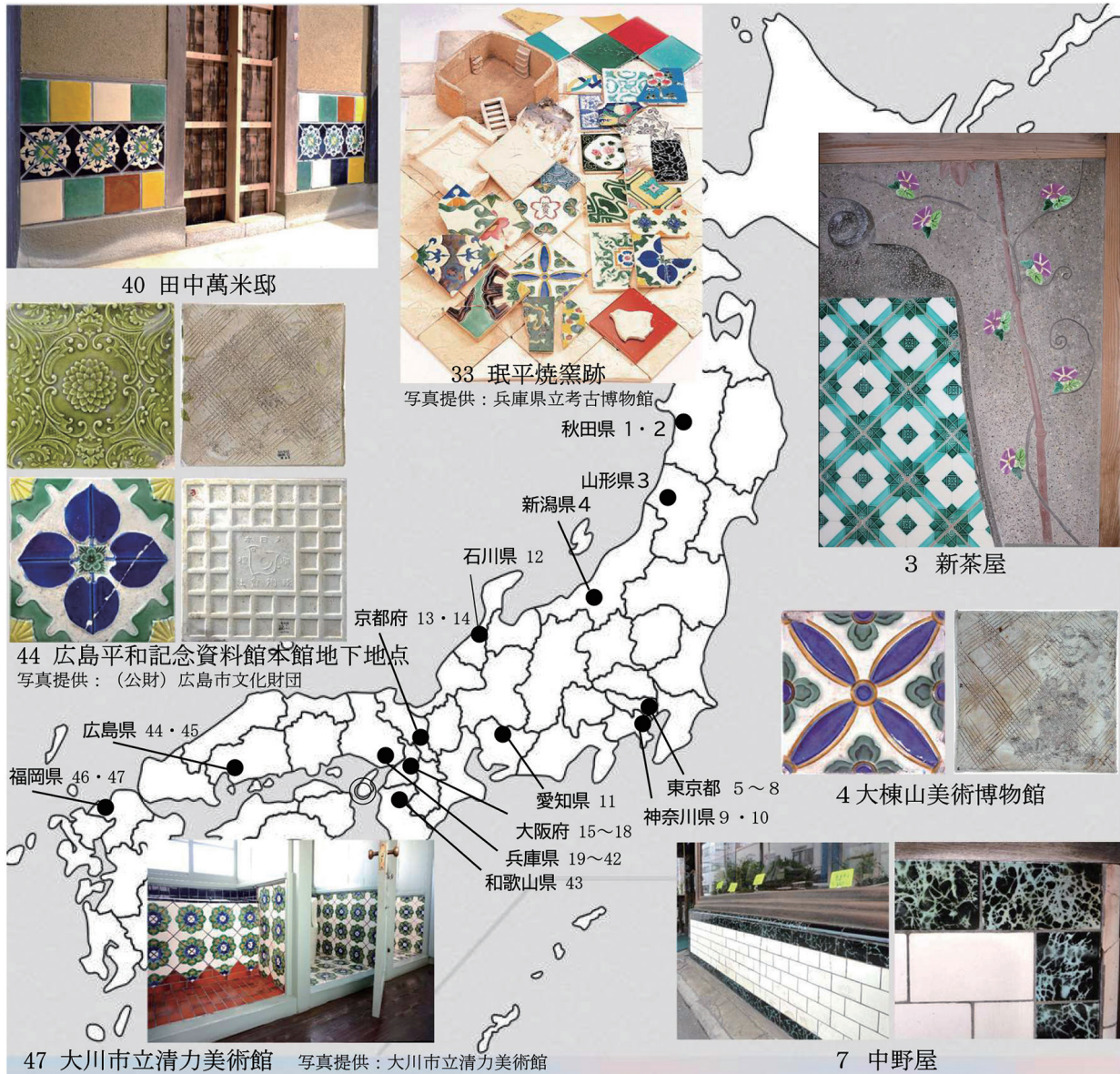
以上、アジア・アフリカを中心に47例、生産者7社が確認された。中でも淡陶19例を最多に不二見、佐藤、佐治の9例、月星2例、日本タイルと山田が1例と続く。これらの生産者は全国硬質陶器タイル業者生産実績（昭和9～11年）上位7社に該当することから、生産量と確認数が相関する。また各社が輸出向けの生産体制や流通経路を持ち得たことも裏付けている。

(2) 国内における日本製タイルと淡陶社製タイルの確認例

我が国における戦前及び戦後の昭和30年頃までの建造物や、発掘調査等で生産者が判明したタイルを第7表により記載し、第6表で数量をグラフ化した。横軸に国内生産者・産地、外国産は国名を記し、縦軸には判明した箇所数を表す。

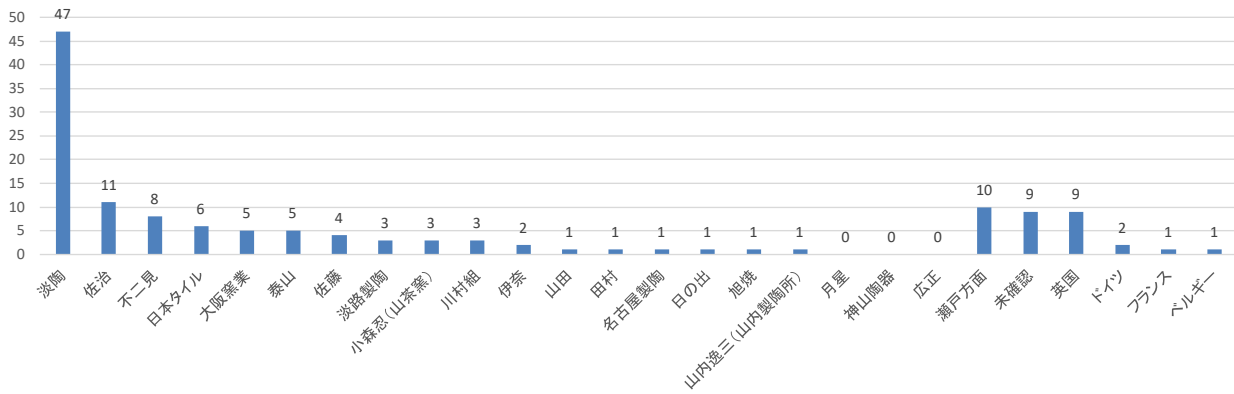
確認された箇所数は133件で、都道府県数は19と全体の4割にとどまる。これはタイル調査が未実施であることが要因と考えられる。メーカーや産地、外国産の数では淡陶が47カ所と最多である。これは淡陶のタイル裏型が詳細に把握され確認しやすいことも理由と考えられる。現存する建造物が健全であれば、あえてタイルを剥がさないことから今後の調査により確認数は増加するものと思われる。

国内例で最も多い淡陶例について考える。東は秋田県から西は福岡県までの13都道府県で確認されている。これらの内、特に象徴的な例を第6図に明示した。3新茶屋例は朝顔などの形象タイルが多数使用され、淡陶製品とわかるマジョリカタイルも現存し、大正期の華やかなトイレが今に活かされている。7中野屋の商品台にはマーブルタイルが残る。淡陶以外のメーカーも手掛けているタイルだが、白色の筋部分がやや薄緑かかっているのが特徴で保存状態も良好で貴重な資料である。40は田中萬米邸の明治37（1904）年に建てられた風呂場で、色鮮やかな湿式タイルを使用した洋風タイル風呂の最古例である。44広島平和記念資料館出土品は終戦直後に埋められ公園化されたことから戦前の資料が純粹に埋没しており、湿式や乾式マジョリカタイルが多数出土した。戦前の生活とタイルとの関係が分かる重要な資料である。47大川市立清力美術館の便所では湿式タイル352枚がほぼオリジナルな状態で、明治41（1908）年から118年間にわたり現役タイルとして使用されている稀有な例である。



第6図 日本各地の淡陶社製タイル分布図

第6表 国内におけるタイル裏型による生産者確認件数グラフ



第7表 淡陶社製タイル国内一覧表

No.	名称	所在地	使用箇所等	建築等年代	淡陶品名	裏面等特徴	編年時期	文献
1	旧秋田銀行本店	秋田県秋田市	増築金庫前室壁	大正	乾式 マーブル報 T139	不明	不明	1
2	旧池田氏庭園洋館	秋田県大仙市	洋館便所壁	大正 11 (1922)	乾式 浅黄無地	報裏型 B 亜種	大正後期	11
3	新茶屋	山形県鶴岡市	男子便所壁・床	安永年間頃 (1772 ~ 1780)	乾式 淡陶カタログ No.4 黄 18 点、No.14 235 点、淡陶? No.84 36 点、No.308 形象朝顔 20 点、No.307 形象桜 8 点	報 No.4 裏型 A4、No.14 裏型 D	大正初頭・末 期	27 P8-9
4	大棟山美術博物館	新潟県十日町市	不明	宝暦 5 (1755) 以降	湿式 (T5) 七宝文 8 点	クシガキ 7 条	明治 30 年代 末 ~ 40 年代	27 P8-9
5	東京科学大学	東京都目黒区	大学博物館所蔵	-	湿式 3 種・乾式 9 種	紀年墨書あり編年基準	明治 30 年代 ~ 昭和 50 年代	17
6	雑司が谷遺跡	東京都豊島区	出土品	-	乾式 マーブル調	報裏型 F 類	昭和 10 年代	33
7	中野屋	東京都荒川区	店頭販売台側面	大正 12 (1923)	乾式 マーブル報 T139	報裏型 C 類	大正中期	
8	小出邸	東京都三鷹市	応接室ストーブ置き場床 応接室脇便所	大正 14 (1925)	乾式 茶無地報告 T195-4 乾式 白無地	報裏型 B13 報裏型 C・D 類	不明 大正中期	35
9	山下居留地遺跡	神奈川県横浜市中区	48 番地遺構外	-	乾式 3 インチ平	報裏型 B21	大正 ~ 昭和初期	
10	ペーリック・ホール	神奈川県横浜市中区 山手町 72	1F 台所・配膳室・洗面、 2F 浴室	昭和 5 (1930)	乾式	珉平焼窯跡 F (正方形凸部)	昭和初期	13
11	玉の湯	愛知県瀬戸市別田町	壁面タイル絵	明治創業	乾式 白無地絵付け	報裏型 B1	大正前期	7
12	旧栗ヶ崎遊園	石川県内灘町	大浴場壁	大正 14 (1925)	クジャク絵付け	報裏型 CorD]	大正中期か末	
13	京都大学大学院建築学教室資料	京都府京都市左京区	所蔵品	-	淡陶：マーブル			
14	旧尾藤家住宅	京都府与謝野町	増築便所壁	大正 13 ~ 14 (1924 ~ 1925)	乾式 報告 T117	報裏型 D6	大正後期	6
15	福島 1 丁目所在遺跡	大阪府大阪市福島区	出土品 (建物壁)	大正 8 (1919)	乾式 すみれ文報告 T103	報裏型 C1	大正中期	
16	大坂城跡	大阪府大阪市中央区	大坂城跡 OS05-06 出土品	近世	乾式 花柄報告 T101	報裏型 D 類	大正後期	6
17	旧大阪府庁舎跡	大阪府大阪市西区	増改築部	明治 3 (1870) (増改築：大正 初期以降)	乾式白無地 乾式白無地 乾式白無地	報裏型 A4 (格子) 報裏型 F (正方形凸部) 報裏型 (G1 横細線)	大正初期 昭和初期 昭和戦前	
18	旧西尾家住宅	大阪府吹田市	床下	明治 28 (1895) 以降	乾式白無地	報裏型 C1	大正中期	28
19	甲南遺資料館 (旧高嶋平介邸)	兵庫県神戸市東灘区	洗面・浴室・便所	昭和 5 (1930)	乾式 白無地	報裏型 F (正方形凸部)	昭和初期	8
20	塚口城跡	兵庫県尼崎市	出土品	中世 ~ 近代	乾式	年表分類 N1 (ホームベース)	昭和 32 ~ 54	23
21	西宮神社社頭遺跡	兵庫県西宮市	出土品	中世 ~ 近代	乾式 白無地 乾式 白無地	報裏型 F (正方形凸部) 報裏型 G1 (横細線)	昭和初期 昭和戦前	20
22	旧山邑家住宅	兵庫県芦屋市	付属建物など	大正 13 (1924)	乾式	年表分類 N1 (ホームベース)	昭和 30 ~ 平成初	
23	旧平安家住宅	兵庫県川西市	中庭腰壁	大正中後期	乾式 白無地	報裏型 C1	大正中頃	25
24	梅谷家住宅	兵庫県播磨町	洗面所・便所	昭和 13 (1938)	乾式 白無地	報裏型 G1	昭和 10 年代	
25	旧来住家住宅	兵庫県西脇市	竈	大正 7 (1918)	乾式 / 黒無地	報裏型 B17	大正・昭和初頭	27
26	梶原氏 (西梶原) 邸	兵庫県姫路市	主屋便所	大正中期?	乾式 報告 T97 T152 T172 T192	裏型型式不明		
27	旧山本家住宅	兵庫県姫路市	主屋脇便所	大正 7 (1918)	乾式 報告 T2	不明	明治末	
28	室津の民家	兵庫県たつの市	建物外壁	昭和 20 (1945) 以前	乾式 報告 T111・155・157・161	不明	大正・昭和初頭	17 P228
29	田淵氏邸	兵庫県赤穂市	台所流し・土間竈	昭和 5 (1930)	乾式 白無地・茶無地	報裏型 C1・G 系ほか	大正中期・昭和 20 年代	
30	山下町居屋敷遺跡	兵庫県洲本市	出土品	古墳	乾式 白無地	報裏 G 昭和 22 紀年名	昭和 22 以前	
31	野口早苗氏旧蔵	兵庫県洲本市	蒐集品	近代	乾式 22 種		明治後期 ~ 昭和 戦前	
32	由良 4 丁目墓地内の 濱岡家墓地タイル	兵庫県洲本市	墓地 1942 (S17) 4 月 建立	近代	淡陶 No.1 (裏型 C1) 花柄、No.64 の 4 枚組花柄、No.65 の 4 枚組アヒル柄、 No.350 白片面取り (裏型 G1) など	報裏型 C1・G1	大正・昭和 10 年代	
33	珉平焼窯跡	兵庫県南あわじ市	出土品	江戸 ~ 昭和	湿式 67 種・乾式 150 種・形象 9 種・ 土型 11 種・金型 106 種	報裏型基準、湿式 7 種、 乾式 63 種	明治 ~ 昭和	17 P109- 129 225-257
34	珉平焼窯跡周辺採集品	兵庫県南あわじ市	採集品	近代	湿式・乾式・土型・窯道具・霊名簿タイル他	珉平焼窯跡出土品同等	明治 ~ 昭和	12・17 P231・ 26 P14-17
35	樺田善九郎邸	兵庫県南あわじ市	通路 風呂場	不明 大正 7 (1918)	湿式 報告 T2・T7 乾式 白無地絵付け	裏型不明 裏型不明	明治 30 代 不明	
36	木下家蔵	兵庫県南あわじ市	伝世品	近代	湿式 霊名簿タイル、乾式 色無地他	裏型 G1・K2	昭和 10 ~ 20	27 P9
37	土井家住宅	兵庫県南あわじ市	別棟便所・廊下壁	明治 1 (1868) の増築部	乾式 20 種 80 点以上 報告 T69 色 違・70・71・73・73 色連 2 種・75・ 77・77 色連・79・81・82・83・83 色連・84・86・88・89・91・91 色連	報裏型 A3	明治末	
38	流遺跡	兵庫県南あわじ市	出土品	-	乾式 白無地	報裏型 GH 類・MADE IN OCCUPIED JAPAN	昭和 22 ~ 27	17 P228
39	当麻山背陵南方	兵庫県南あわじ市	採集品	-	湿式 乾式各種タイル・陶器・匣鉢	湿式クシガキ 7 条・A 類他	明治末 ~	12・17 P231・ 27 P14-17
40	田中萬米邸	兵庫県南あわじ市	離れ風呂場壁 離れ風呂場焚き口壁 増築風呂場	明治 37 (1904) 明治 37 (1904) 大正 7 (1918)	湿式 報告 T2・T3・T12 湿式 素焼品報告 T1・T2 乾式 白無地・疑石	7 × 7 クシガキ 8 条・ 6 × 6 クシガキ 6 条 7 × 7 クシガキ 8 条・ 6 × 6 クシガキ 6 条 報裏型 C 類	明治 30 代 明治 30 代 大正中期	
41	株式会社淡陶社	兵庫県南あわじ市	伝世品	-	湿式 9 点・乾式 399 点以上・金型 115 点	紀年墨書あり編年基準	明治 ~ 昭和	12・17 P227
42	淡陶社福良事業所 南西部 (福良湾内)	兵庫県南あわじ市	海浜部採集品	大正 7 (1918) ~	乾式 20 種以上・洋皿・亀形花留・ 匣鉢等	乾式全型式 (乾式 A 類 を除く)	大正 ~	9・10
43	高野山関東震災霊 牌堂タイル製霊名簿	和歌山県高野町	霊牌堂地下保管	昭和 5 (1930)	湿式、縁文様型打出し	両面周縁に蓮華唐草文レ リーフ、両面に 150 人の 呉須による人名記名	大正末 ~ 昭和 初期	
44	広島平和記念資料 館	広島県広島市中区	出土品 (旧貿易商・風呂屋)	明治 ~ 昭和戦前	湿式 花文レリーフ 乾式 花紋レリーフ	湿式クシガキ 7 条・乾式 A3・6 × 3B 類・D 類・F1	明治末 ~ 昭和 初期	5
45	天満川河床	広島県広島市中 区・西区	採集品	-	乾式 幾何学文・霜降・無地	報裏型 D5?・F・B10・ B18?	大正 ~ 昭和 20 年代	32
46	旧福岡県公会堂	福岡県福岡市中央区	貴賓館	明治 43 (1910)	湿式	湿式クシガキ	明治	34
47	大川市立清力美術館	福岡県大川市	便所	明治 41 (1908)	湿式 白基調環珞文	湿式クシガキ 7 条	明治 40 年代	27 P8-10

4 まとめ

タイルを主眼においたタイル考古学は珉平焼窯跡発掘調査以来、僅か20年余りの歴史である。その意義はタイル一片で生産者や製作年代が判明することも可能であることにある。今まで文献で推定する方法から、「モノ」を観察し科学的に究明することで年代等が判明することが可能となってきた。珉平焼窯跡発掘調査報告書が刊行されるまでタイル裏型に注目し年代により変化することを示唆してきたものは、文献(4)、(29)で記述されるのみだったが、珉平焼窯跡で提示した淡陶タイルの編年確立以降、文献(2)～(5)、(20)、(23)、(31)～(33)の出土品の年代決定に寄与している。

今回、淡陶社タイルの裏型編年はタイル製造開始時期の明治20年代から現在までの約140年に及ぶ6インチタイルを基本に編年した。しかしタイル考古学の課題は戦前期に存在した主要タイルメーカー十数社の裏型を比較検討して国内メーカー全体の編年を確立することである。これには多種多様な各社の製品の比較検討が必要なことから、タイル所有者の協力が不可欠である⁷⁾。

タイルの裏型の確認は付着した接着剤等を除去して明らかになる。現在、塩酸などの化学薬品で不着物を溶解させる方法を実験中である。剥離の際は現状の記録やサンプルの採取が必要である。

タイル考古学は考古学的手法のみで全容が判明するものではない。タイルを取り巻く関連分野と協調ではじめて成立する。考古学においては窯業生産や消費地での調査。建築史に関連する保存調査・修理等の年代観の提供。物質研究では坯土・釉薬・接着剤等の分析と時代変化の把握。美術・芸術では作者・生産者・文様の解明。文化史では文化や歴史的意義の理解。愛好家はタイルの所在情報の交換や愛好者・協力者の育成。メディアに対してはタイル文化の創造や発信を通じて理解者の醸成を行う。これらを通じてタイル文化の保護・継承・発展へと昇華させることが必要である。

謝辞

本学の木立雅朗先生には珉平焼窯跡発掘調査において指導をいただいたほか、タイル研究について多岐にわたってご指導を賜りました。記して感謝の意を表したい。

小稿では大川康裕、岡田章一、木下道子、高野敬子、田中豊也、豊山亜希、堀込憲二、増田研、徐嘉彬、株式会社新茶屋、大棟山美術博物館、株式会社淡陶社、中野屋、公益財団法人広島市文化財団、兵庫県立考古博物館をはじめ多数の関係者に協力を得た。(順不同 敬称略)

注

- 1) 淡陶社の裏型分類は文献(17) P253-257に提示している。本稿では新型式を表2・3の編年表に盛り込んだ。
- 2) レリーフタイルは文様を浮彫りで表す方法で、凸部は釉薬が薄く、凹部は釉溜まりより濃く表現される。
- 3) チューブライニングタイルは釉薬の混合防止に凸線を仕切りとして文様を描く技法で、均一な色合い表現になる。
- 4) スーパーサーラグはアメリカのタイルにならない輸出用に付けられた。タイル側面に高さ2mmの突起を持ち、施工時に密着させれば目地が一定間隔に保てる。昭和35年から40年代を中心に、52年頃まで生産された。
- 5) 淡陶社陶器質内装タイル製品規格GAI(昭和35.11.1)により、1工場名、2製造年、3製造月、4成形機種、5成形機名、6金型番号、7会社名、8国名が記される。工場名はA:阿万、F:福良、U:宇都宮、H:福山を表す。
- 6) 淡陶社製湿式タイルの海外例は堀込憲二氏が台湾で蒐集され、世界のタイル博物館ではシンガポールから蒐集している。これらから少なくとも明治40年代に海外に輸出されていたことを物語る資料である。

- 7) 国内有数の高野敬子コレクションが(株)淡陶社に寄託されている。コレクションは淡陶社の他、各社が生産した同種のタイルが含まれており、比較検討資料として活用が期待される。

参考文献

- (1) 秋田市立赤れんが館 1995「赤れんが館のあゆみと記録」
- (2) 天野賢一ほか 2010『山下居留地遺跡』財団法人 かながわ考古学財団
- (3) 市村慎太郎編 2012「旧大阪府庁舎跡」公益財団法人大阪府文化財センター
- (4) 柿田富造ほか 1991『日本のタイル工業史』株式会社 INAX
- (5) 楯木敬太ほか 2020『名勝平和記念公園内遺跡 広島平和記念資料館本館下地点』公益財団法人広島市文化財団
- (6) 酒井一光 2006a「[タイル探訪] 第2回土の中から/まちの中から」『月刊タイル』No.523
- (7) 酒井一光ほか 2006b「煉瓦のまち・タイルのまち」大阪歴史博物館
- (8) 酒井一光 2011「新タイル建築探訪 甲南漬資料館(旧高嶋家住宅)『タイルの本』42号 タイルの本編集室
- (9) 坂口英伸 2014「東京美術学校と関東大震災」『東京藝術大学美術学部紀要』第52号 東京藝術大学美術学部
- (10) 坂口英伸 2015「『大正十二年関東震災歿死者名簿』の保存筒」『モニュメントの20世紀 タイムカプセルが伝える〈記録〉と〈記憶〉』吉川弘文館
- (11) 大仙市教育委員会 2010『【国指定 名勝旧池田氏庭園】洋館修復の記録』
- (12) 淡陶(株) 1976『日本のタイル文化』日本のタイル文化編集委員会編 淡陶株式会社
- (13) ダントー(株) 2003『The Tile Front 2003 Vol.3』
- (14) 豊山亜希 2014「ハーヴェーリーにおける「インド的近代」の表象」『多民族社会における宗教と文化』17: 3-23 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所
- (15) 豊山亜希 2016「戦間期インドにおける日本製タイルの受容とその記号性」『社会経済史学』82-3 社会経済史学会
- (16) 平野耕輔 1940「布袋荘小誌」
- (17) 深井明比古ほか 2005a「珉平焼窯跡」兵庫県教育委員会
- (18) 深井明比古 2005b「台湾タイル紀行 その1台北編」『月刊タイル』No.520 黒潮社
- (19) 深井明比古 2005c「台湾タイル紀行 その2澎湖島編」『月刊タイル』No.521 黒潮社
- (20) 深井明比古ほか 2011a『西宮神社社頭遺跡発掘調査報告書』(一)西宮港線電線共同溝整備事業に伴う発掘調査報告書 兵庫県教育委員会
- (21) 深井明比古 2011b「プラナカン文化のタイル—シンガポール編」『タイルの本』45号 タイルの本編集室
- (22) 深井明比古 2011c「プラナカン文化のタイル—マラッカ・ペナン編」『タイルの本』47号 タイルの本編集室
- (23) 深井明比古ほか 2013『塚口城跡』—都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 兵庫県教育委員会
- (24) 深井明比古 2014「台南・高雄のタイル」『タイルの本』80号 タイルの本編集室
- (25) 深井明比古 2016『タイル考古学でみる平安邸』川西市郷土資料館 タイルのふるさとを訪ねてレジュメ
- (26) 深井明比古 2018「日本とアフリカの交流史を解くカギ」『和製マジョリカタイル—憧れの連鎖』INAX ライブミュージアム
- (27) 深井明比古 2024「兵庫とタイルの歴史」『兵庫とタイル』兵庫県タイル衛生陶器商組合
- (28) 藤原学 2009「タイル」『旧西尾家住宅総合調査報告書』吹田市立博物館編 吹田市教育委員会
- (29) 堀込憲二ほか 2003『流光凝煉方寸間』臺灣與荷蘭老磁磚展 臺北縣鶯歌陶瓷博物館
- (30) 堀込憲二 2024『臺灣磁磚系譜學 臺灣磁磚大百科・八大類磁磚鑑賞』遠流出版事業股份有限公司
- (31) 増田研、深井明比古 2019『ザンジバルにおける日本製タイルの流通と利用』長崎大学多文化社会研究 5
- (32) 増田研・深井明比古「広島市、天満川におけるタイル散布地—生活史へのタイル考古学的アプローチ」『半田山地理考古第8号』岡山理科大学
- (33) 両角まりほか 2010『雑司が谷Ⅲ』豊島区遺跡調査会調査報告 22
- (34) 阿木香・新見隆・日野永一・山本正之・伊奈英次 1991『日本タイル博物誌』株式会社 INAX
- (35) 渡邊保弘ほか 1999『東京都江戸東京博物館分館 江戸東京たてももの園 小出邸移築工事報告書』財団法人東京都歴史文化財団
- (36) 徐嘉彬 2021『重返花磚時光』境好出版事業有限公司
- (37) Anne Pinto-Rodrigues・Victor Lin 2015『Peranakan Tiles SINGAPORE』

(ふかい・あきひこ (株)淡陶社上席研究員/兵庫県立考古博物館名誉学芸員/元本学文学研究科授業担当講師)

*Archaeology of Ceramic Tiles in Modern and Contemporary Times: Through the
Chronology and Distribution of Dantosha's Products*

by

Akihiko Fukai

In Japan, historical heritage from the Meiji era (1868-1912) to the years before WWII in the Showa period (1926-1989) has come to be recognized as modern cultural heritage. Sites of particular importance for understanding regional history are being excavated and studied as “modern ruins.” This study reports on tile production artifacts identified during the 2003 (Heisei 15) excavation of the Minpei-yaki kiln site in Minami-Awaji City, Hyogo Prefecture, as well as on ceramic tile fragments collected from the marine area near the Fukura Factory, operating as a ceramic tile-dedicated facility since 1918 (Taisho 7).

Dantosha began experimental ceramic tile production in the 1880s at its Ama Factory established in 1885 (Meiji 18) in Kita-Ama Igano, Minami-Awaji City, Hyogo Prefecture. The company initiated full-scale Western-style ceramic tile production in the 1890s, utilizing traditional Minpei-yaki techniques: mold forming, a wide variety of glazes, and high-temperature firing. In 1908 (Meiji 41), Keizo Nose, who had studied ceramics at Tokyo Higher Technical School, returned to his hometown to join the Dantosha Company and succeeded in developing dry-pressed tile manufacturing. The Fukura Factory was completed in 1918 (Taisho 7) and along with that of the Ama Factory, tile production increased, establishing the company as a leader in modern and contemporary tile manufacturing.

Based on the above, the classification and chronological organization of ceramic tiles produced over approximately 140 years from the 1880s to the present (2025), form a central axis in understanding the development of Japan's ceramic tiles culture. The findings presented here provide valuable resource material for elucidating historical and cultural heritage throughout the world.